

モニタリングサイトの種構成の変化

モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査は、2004/05 年に開始し、今シーズンで 19 年目になります。長い年月の間に、飛来するガンカモの種類が徐々に変化したサイトもあります。調査開始以降、種構成が大きく変化したサイトにおいて、変化が生じた要因について調査員の皆さんにインタビューをしました。

オオヒシクイとマガンが入れ替わった - 鵜ノ池 (新潟県)

調査員：山田雅晴さん

マガンは以前、鵜ノ池のすぐ隣にある朝日池を主なねぐらにしていたのですが、2000 年頃から鵜ノ池も利用するようになりました。越冬数が 3000 羽を超え過密になったことや、鵜ノ池がねぐらとして安全な場所（銃猟がほぼ無くなった）と認知されたためだと思われます。オオヒシクイは朝日池と同様に鵜ノ池もねぐらとしてよく利用していましたが、2010 年代から越冬数自体が減少し、1000 羽を超える群れが渡来する時期もしだいに遅くなっています。そのため鵜ノ池を利用する羽数も総じて減少傾向にあります。

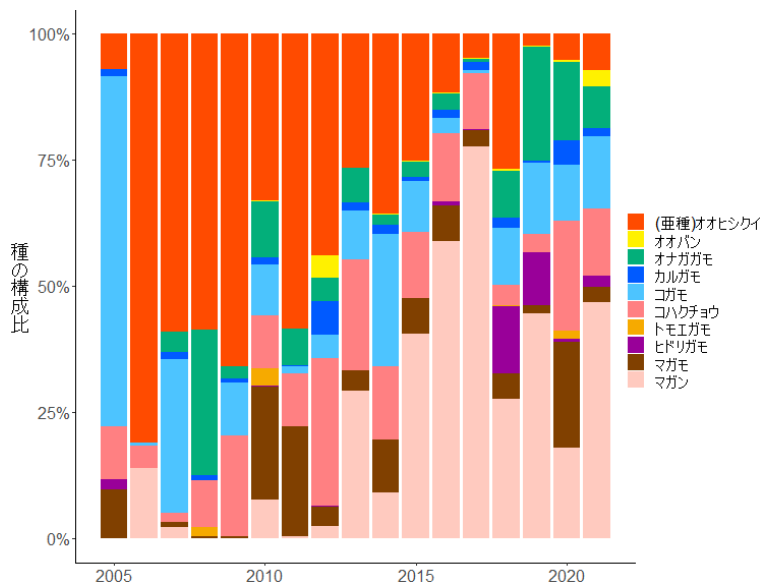


図 1. 鵜ノ池の種構成の変化

マガモとカルガモが減りスズガモが増加 - 涸沼 (茨城県)

調査員：池野進さん

マガモとカルガモは夜間に涸沼周辺の水田で採食しているようです。周辺水田では秋に稲を漉き込む秋耕や、畑作への転換、耕作放棄地が増えているために餌場が減少したことが考えられます。また、涸沼では東北地方太平洋沖地震に伴い湖底が攪乱されたためか、ヤマトシジミの水揚げ量が減少していました。他の貝類にも影響があったようで 2011/12 年以降は貝類を食物にするスズガモが減っていましたが、その後貝類の資源量などが改善したのか、近年、スズガモは再び増加してきています。

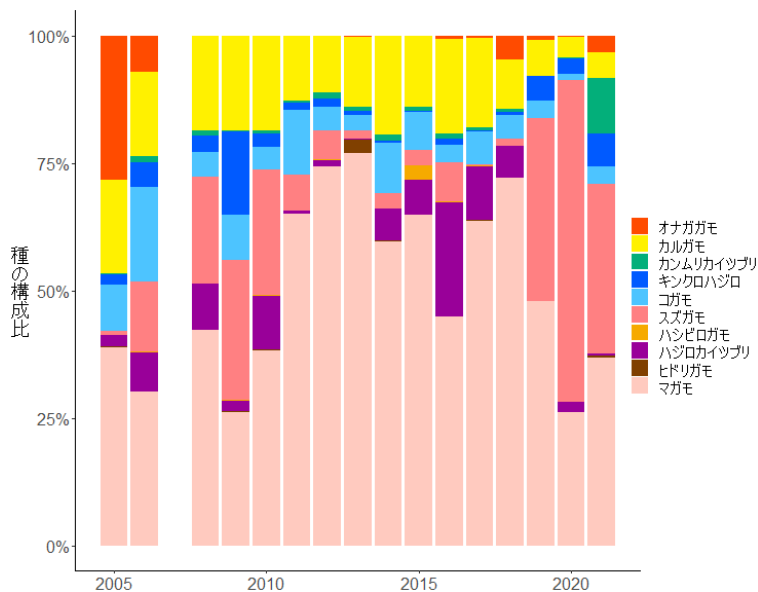


図 2. 涸沼の種構成の変化

カルガモとヒドリガモが減り、マガモとヨシガモが増えた－霞ヶ浦の高浜入（茨城県）

調査員：川崎慎二さん

霞ヶ浦の高浜入は護岸された部分が多く、カモ類が採食できる浅瀬の少ない場所です。ヒドリガモとオオバンが減っているのは、食物である水草に変化があったからかもしれませんが、一方で食性が近いヨシガモは増加しています。マガモやカルガモは水面を休息地に利用しているだけで、夜になると別の場所へ採食に出かけます。高浜入周辺は水田やハス田が広がっていて、そこが彼らの採食地になっていると考えられることから、農地に何らかの変化があり、これらの種の増減に影響しているのかもしれない。

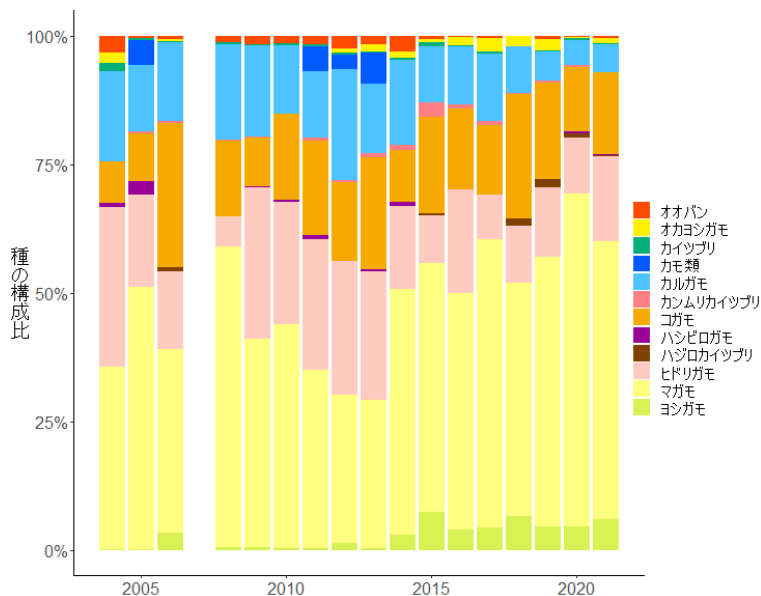


図3. 霞ヶ浦の高浜入の種構成の変化

ホシハジロが増えた－松岡・敷戸の溜池群（大分県）

調査員 杉浦嘉雄さん

ホシハジロは溜池群の中でも主に笹尾第二堤という池にいます。ここでは休息しているのではなく潜水採食をしているので、池の底にホシハジロの餌となる生物が生息しているため、ここに集まっているのだと思います。ホシハジロは、調査開始当初は0羽でしたが、近年は120羽ほどに増加しています。一方、記録上ではオシドリが減っていますが、これはオシドリが多い池の周辺の樹木が成長してオシドリを数えることが難しくなったためで、実際はもう少しいるのかもしれない。隣接する住宅地との間が樹木で遮られ、池の水面が見えなくなっていることからオシドリにとっては生息できる環境が守られていると言えるでしょう。

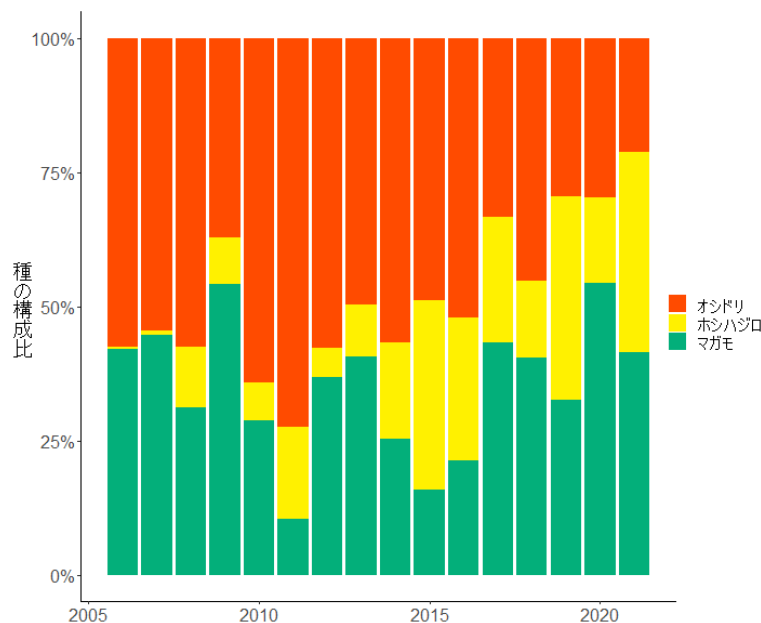


図4. 松岡・敷戸の溜池群の種構成の変化